

2002 Joint Conference of the Wound Healing Society
and the European Tissue Repair Society参加記

札幌医科大学 医学部 皮膚科 小野一郎

学会会場のRenaissance
Harborplace hotelの夜景

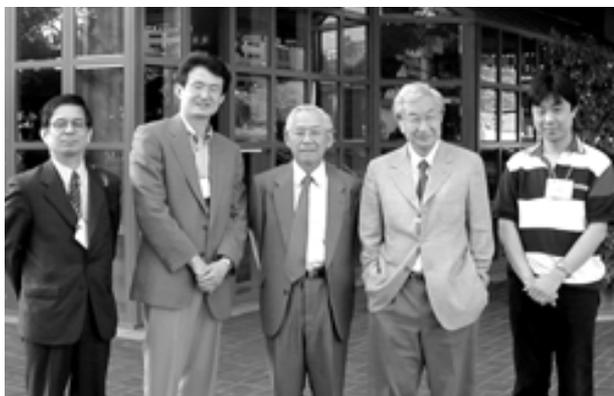


今年の5月29日から6月1日まで
米国のボルチモアで開催された
Wound healing Society (WHS)・
European Tissue Repair Society
(ETRS)のjoint conference(合同
会議)に参加して参りました。ボルチ

モアは米国の主都のワシントンD.C.の北東65 kmに位置するメリーランド州最大の
都市で人口約65万人、全米で18番目に大きい都市で、港町、工業の町、そしてス
ポーツの町、そして最近では観光の町として知られています。また、ボルチモアは野
球の神様のあのベープブルースの生地としても有名です。

学会が開催されたのは水路貿易が盛んであった頃の面影を残すインナーハー
バーに隣接するRenaissance Harborplace hotelです。御存じのようにこのイン
ナーハーバーはウォーターフロント計画の先端をきって実行されたもので日本の海辺の
各地でもここボルチモアを手本として実現された経緯があります。そのせいか横浜の
ウォーターフロントを小さくした雰囲気があります。このことからもお理解頂けますよ
うに日本人にとっては大変に落ち着けてしかも海産物をはじめとした食事を楽しめる
たいへんに風光明媚な都市です。私は成田 - Chicago - Baltimore / Washinton
経路でおよそ日本から10時間程度で到着しました。

学会の開始の前日の5月28日の夕方からはwelcome partyがあり、日本からも数
人の先生が御参加になりました。ただ、国際学会のwelcome partyは大体そうで
すが日本の学会の懇親会のように豪華な食事が並ぶこともなくサンドイッチやチー



ズとワインを片手に参加
者が旧交を暖めながら話
し込むといった風景があ
ちこちで見られました。日
本からの参加者は日本
創傷治癒学会の名誉会

学会会場前の日本からの参加者。
右から秋野先生、塩谷先生、大浦先生、
秋田先生、小野。



NEWS
LETTER

日本創傷治癒学会

2002.6
No.9

日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel. 03-3353-1211

(内線62269)

fax.03-3353-2681

e-mail:info@jswh.com

学会第2日Burns, Burn wound careという熱傷に関するplenary sessionから開始され、それに引き続きKeynote presentationとしてRegulation of Oxygen homeostasis by hypoxia-inducible factor 1とplenary sessionとしてReactive oxygen species in wound repairが発表されました。Hypoxia とhyperbaricという全く相反する状況下での創傷治癒についての講演で私も少し混乱しておりますが、酸素の代謝(酸化)というプロセスの果たしている役割についての貴重な講演を聴くことができたと思っています。

第2日の午後は前日と同様、一般演題としてinfection & inflammation, non-dermal repair, stem cells in repair, keratinocyte biologyのsessionが開催されました。この中で私は日本でもここ数年注目されている前にも述べましたstem cells in repairのtopicsを中心に聴きました。このsessionは大変に興味深い講演が多くあり、特にbone marrow 由来のstem cellがwound bedにfibroblastにかわって出現するというDr. S. R. Opalenicの発表(Bone Marrow-derived stem cells in wound healing)は大変に衝撃的で今後の創傷治癒研究、再生医療のあり方にも大きな影響を与えるのではないかと感じました。

この日の夕方7時からは会員懇親会がThe National Aqualium in Baltimoreで開催されました。この水族館は全米でも3指に入るといわれる素晴らしいもので前述のインナーハーバーのピア3にあります。いかにもアメリカ



Restaurantで寛ぐ、右から徳永先生、塩谷先生、私、大谷先生。

的な大きな水槽にえいの群れが泳ぐ大変に広大でその水槽は一見の価値ありと思います。会員懇親会は閉館後のこの水族館を全館貸し切りにして進められました。多くの参加者がありましたが大きな会場であり一時は閑散とした感じもありましたが、party会場では多くの参加者が集いお互い親交を深めると共に色々な話題に(仕事ばかりでなく野球などについても)打ち解けたムードで夜遅く迄歓談していたのが印象的でした。なお、この日のお昼休みの時間にはWRR誌の委員会が開催され、日本からは塩谷先生、大谷先生と私が徳永先生の代理で参加させていただきました。その折に日本創傷治癒学会の現状についても大谷先生から報告がありました。WRRの購読者数も我が国は米国に次いで第2位であり投稿論文の数も増加傾向にありますので今後も日本の会員の協力が大変に重要であると改めてEditorのDr. Lindbladも強調されていました。この会の議事の詳細については次回の学術集会の総会でも大谷先生から御報告があると思います。

引き続き3日目は一般演題としてfibrosis & contraction, Burns, matrix biology, Bioengineeringの各sessionが開催されました。こちらのsessionでも米国、ヨーロッパの研究者に加え、日本や中国の研究者から大変に興味深い独自の研究成果が報告されていました。午後にはplenary sessionとして我が国でも大きな社会問題となりつつあるchronic woundに関する講演がありました。すでにchronic woundの成因に関して多くの報告があるものの改めて患者数の多い欧米のこの方面における



学会会場の雰囲気。Dr. Fergusonの講演です。

取り組みの真剣さに感銘を受けました。第3日目の終わりはpoint/counterpoint debateという私には全く初めての形式のsessionでした。これは一つの最新の論点(例えばgrowth factorの臨床応用の実現は創傷治療にインパクトを与えたか? Growth factors have made no impact on clinical wound healing)といったテーマでproとcon(賛否)の議論を代表1人ずつ発表し、さらにdebateをして会場の参加者が挙手で賛否を決定するというものでした。Dr. M. W. J. FergusonとDr. K. Cohenという大御所のお二人の先生の司会進行の下、冗談半分、論文を引用しながら相手の矛盾をつくなど半分は真面目で強烈な意見が飛び交うといった状況で、笑いも交錯する、私にとっては大変に印象深いsessionではありました。このsessionでは、ほかにもHBO does not contribute to clinical wound healing, Wound closure is the only valid end point for validating wound healing proceduresという論点が議論され、内容も議論の形式も大変に興味深く聞かせていただきました。また、この日の夕方にSecond World Union of Wound Healing Society Meetingの打ち合わせ会があり日本からは塩谷先生、大谷先生に加え、私も参加させていただきました。このmeetingは2004年6月8～13日にフランスのパリで開催予定でWHS・ETRSも同年の学会をキャンセルして共催することとなったとの報告を受けました。日本創傷治癒学会としてこの学会に対してどのような対応をするかについても議論がありましたが、正式な対応に関しては理事長にご報告の上でなければ明言できない点、また国内の学会をキャンセルすることはないであろうという点と、もしWorld Unionとうたうのであれば日本を始めアジアの研究者のBoard memberに加えていただく方が自然であろうという旨の発言をいたしました。なお、参加者は3000人以上を予定しているということです。会期やその他の詳細は追って学会誌や学会でお知らせする事となると思います。また、2003年のWound healing Society Annual Meetingは2003年5月3～8日にシアトルでDr. EhrlichとDr. Gibsonの主催で開催されます。一方、European Tissue Repair SocietyのAnnual Meetingは2003年9月にDr. Middelkoopの主催でオランダのアムステルダムで開催予定とのことです。

最終日の午前中は欧米の若手研究者の研究成果のsessionがありました。恐らくは20歳代から30歳代前半の研究者が自分の研究成果をpresentationしていました。会場にも多くの指導的な立場の研究者が集い、聴衆でいっぱい会場は一般演題の時とはひと味違った緊張した雰囲気の中、熱心な討論が進められました。我が国の学術集会でもこのような企画が実施されると若手の研究者の発表と研究者の交流の機会が増加するのではと感銘を受けながら講演を楽しませていただきました。なお、今回のpresentationはこのsessionを含め統べてcomputer presentationで進められましたが研究内容に加え、それぞれのpresentationにも工夫がされていて興味深く聴くことができました。ちなみに私が参加した会場で見るとcomputer presentationのtroubleは皆無で今後はこのような発表形式が定着するものと改めて実感しました。

本学会の最後は英国のDr. FergusonによるFrom Lab to Clinic: Advances in the Prevention of Scarringsと題するscar-less wound healingに関する講演でした。既に我が国でも何度か講演を伺っておりましてので新たな感銘はあまりありませんでしたが、会場では癒痕を抑制する治療を臨床に早く導入しようという意気込みに溢れたdiscussionがあり、数年前よりはさらに現実味をおびた講演になっていたと感じました。この講演を最後に4日間のWHS・ETRS合同会議はすべての予定を終え閉会されました。

このように約10題の特別口演に加え、一般演題の口演が154題、poster発表が104題、さらに6題のランチオンセミナーと大変に多数の発表があり、600人をこえる参加者がありました。これらの講演、発表に加え企業展示も平行して行われました。今だ日本では目にするのが不可能な製品も並んでいてこちらも注目を集めていました。このように実に興奮に満ち、感銘を受けることの多い実りの多いConferenceでありました。私にとりましては本会には10年程前にアムステルダムで開催されたWHS・ETRS合同会議以来の参加でございましたが、その時に受けたのと同じかそれ以上の大きなimpactは受けました。

員の塩谷先生、大浦先生を始め日本医大の徳永先生、慶應大学の長谷先生、長崎大学から秋田先生、福井先生、秋野先生そして私が参加しました。もう数人の先生のご参加が予定されていたようですが御都合で参加されなくなりましたのが大変に残念でした。

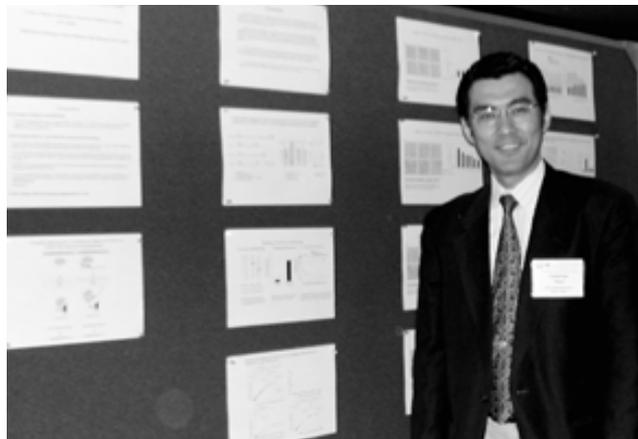
翌日の5月29日から4日間開催されたの学会プログラムは大変に充実したものでした。学会第1日目の午前中はPlenary sessionとしてRepair of different tissueから始まり骨形成、神経系の再生、血管新生治療さらには幹細胞治療の展望が発表されました。これらの分野の発表に関してはすでに日本の創傷治癒学会でも取り上げられたtopicでありましたが、WHS・ETRSも皮膚の創傷治癒のみならずこの分野の重要性を認識しつつあると感じますとともに参加者の興味も大きいように感じました。ただこの点では既にこの分野の特別プログラムをお組みになってこられた日本創傷治癒学会の歴代の会長先生の先見性の確かさを改めて感じました。中でも私が興味がありましたのは幹細胞治療の話題です。この問題に関しては一般演題でもいくつかの演題の発表がありました但未だ臨床応用には時間がかかりそうではありますが、大きな夢として研究が進められているのが実感できました。引き続き米国の企業のCOEのDr. W. A. Haseltineがpost genomeの企業戦略に関して講演しました。スライドを一枚も使わずたんたと再生医療の企業化の考え方を中心に述べるというもので日本の現状を見る時に感銘するというよりも脅威の様なものを感じたのは私だけだったのでしょうか？



学会の合間に参加者と懇談する塩谷先生と大浦先生。

午後は一般演題としてgene therapy, clinical application, growth factor and cytokines, oxygen; the good and the badのsessionが開催されました。この分野では米国、ヨーロッパに加え、日本や中国からも多くの演題が発表されておりました。ここでは長崎大学の秋田先生や私も発表いたしました。4会場に別れて学会が進められましたので私も実際には1/4の演題しか聴くことはできませんでしたが中でも米国で既に市販されているPDGFを用いた治療に関する研究発表が遺伝子治療も含めて盛んに議論されていて興味を引きました。

その夜は塩谷先生のお誘いで日本からの参加者数人が集い、seafood restaurantで食事をすることになりました。美味しいロブスターやムール貝に加え、ボルチモア名物のクラブケーキを始めていただきました。クラブケーキはカニの身をほくしてハンバーグのようにして焼いたものですがボリュームもあり、味もすばらしいものでした。これらの食事とカリフォルニアワイン、そうして塩谷先生や皆様の楽しい話題で夜のふけるのも忘れて大変に楽しい時間を過ごさせていただきました。特にわたしは第1日目に発表を終えていましたのですっきりとリラックスして楽しませていただきました。海外の学会に参加する楽しみの一つは国内ではなかなか御一緒に食事をしながらお話を伺えないように先輩の先生といろいろのお話を伺いながら充実した時間を過ごせるということも大きいと感じました。楽しい時間を過ごさせていただきまして塩谷先生大変に有難うございました。



Poster sessionでの長谷先生。

日本創傷治癒学会ニュース

企業展示も多く、まだ日本でも目新しい製品が展示されていました。これはFibroGen™というrecombinant human collagenのブース。



Baltimore 球場で学会終了後の野球観戦を終え、満足顔の参加者。



Welcome partyの参加者。



The National Aqualium in Baltimoreで開催された会員懇親会の様子。

特に遺伝子治療、幹細胞治療などこれから大きく臨床の考え方を考える予感に満ちた学会であったと思います。さらに言えば研究の方向性が日本よりも多彩な点は大変に私にとりまして得るところが多い会でした。米国を取り巻く国際情勢の環境からか、日本からの参加者は残念ながら今回はあまり多くはありませんでしたが、次の機会には是非若い研究者の方に日本創傷治癒学会で御発表していらっしゃる素晴らしい研究成果を発表していただきたいものと感じています。

最後に学会は朝8時から5時過ぎ迄開催されていますが、学会が終了後にはボルチモアに来る迄全く予想しなかった楽しみがありました。それはボルチモアの球場にSeattle Marinersが来てBaltimore Oriolesと試合をしていたことです。私も日本からの参加者の皆様と球場に行き、Ichiroの活躍を直接観戦することができました。

試合はMarinersがサヨナラ負けという結果でしたが球場の雰囲気、試合を楽しむアメリカの国民気質を堪能できました。このように学会に参加して楽しめたばかりでなく、美味しい食事、楽しいafter 5と大変に充実した思い出をバッグにつめて帰国いたしました。会場やその他の場所でのスナップ写真を掲載させていただきましたが、当然のことながら参加なさった先生は全員学会会場で真剣に討論されていたことを(私自身を含めまして)念のため?に付け加えさせていただきます。

第32回日本創傷治癒学会のご案内(第4次)

第32回日本創傷治癒学会 会長 田井良明(久留米大学医学部形成外科教授)

第32回日本創傷治癒学会を下記の通り、開催いたします。
会員の皆様の多数ご参加をお願い申し上げます。

1 会期: 平成14年12月5日(木)~6日(金)

2 会場: ホテルニューオータニ博多(〒810-0004 福岡市中央区渡辺通1-1-2 TEL:092-714-1111)

3 演題募集締切: 平成14年8月10日(土)必着

4 予定プログラム:

特別講演:

: BMPの骨欠損修復への応用技術

高岡 邦夫教授(大阪市立大学整形外科)

司会: 永田 見生教授(久留米大学整形外科)

: 再生医療の現状と展望

清水 慶彦教授(京都大学再生医科学研究所再生医学応用部門・臓器再建応用分野)

司会: 上石 弘教授(近畿大学形成外科)

ランチョンセミナー: 創傷治癒の新しい展開 - 難治性潰瘍およびオーバーヒーリング対策

徳永 昭 助教授(日本医科大学第一外科)

司会: 野崎 幹弘教授(東京女子医科大学形成外科)

主催: キッセイ薬品工業(株)

: MWH (Moist Wound Healing) Concept & Applications of Wound Dressings

Flemming Wilhelmsen, M.D., M.F.P.M.

Medical Affairs Manager Wound Care Division ColoplastA/S, Denmark

司会: 落合 武徳教授(千葉大学医学部第二外科)

主催: コロプラスト(株)

イブニングセミナー: 「『創傷治癒型』増殖因子FGF-2による階層的血管新生誘導メカニズム」

米満 吉和先生(九州大学大学院医学研究院病態医学専攻病理学講座病理病態学領域)

「創傷治癒におけるbFGFの有用性と新しい臨床応用の可能性」

市岡 滋 助教授(埼玉医科大学形成外科)

司会: 川上 重彦教授(金沢医科大学形成外科)

主催: 科研製薬(株)

パネルディスカッション(公募・一部指定):

: 増殖因子の臨床への展望

: ASO治療の現況(血行と難治性潰瘍への対策)

主題演題(公募・一部指定):

: Scarless wound healing(基礎・臨床)

: 創傷治癒からみた消化管の吻合

: Stoma形成とそのCare

: ハイブリッド型の組織工学

一般演題: 創傷治癒全般に関する演題

(創傷治癒、肥厚性瘢痕・ケロイド、再生医学、組織工学、臨床(症例)報告など)

連絡先

第32回日本創傷治癒学会事務局 事務局長: 清川兼輔(助教授)

〒830-0011 久留米市旭町67 久留米大学医学部形成外科学講座内

TEL: 0942-31-7569(直通) FAX: 0942-34-0834 E-mail: prs@med.kurume-u.ac.jp